

詠む広場

毎日歌壇

戦後81年「戦争・平和」特集

特攻の御霊安かれ扇風機
延岡市 九鬼 勉
かりゆしや軍機反転峰雲に
流山市 小林 紀彦
あらためて憲法を讀む敗戦忌
越谷市 塚田 順次
麦秋や兵器となりてドローン行く
東京 古川 夏子
義手義足義眼工房終戦日
奈良市 馬越 俊宣
敗戦日無知の十七存へて
和歌山市 矢野 淑枝
あゝの頃の焦土を生き延びて
岡山市 和田 大義
始良市 井之川健児
一生のごとき沈黙敗戦忌
東久留米市 矢作 輝
八月の空へ祈りの祈りして
高崎市 小林あつ子
過去帳の「呂宋に眠る」終戦忌
明石市 島谷喜代孝
糸の音や島唄泡盛自決洞
黒石市 東海林小路
語り部のまたひとり逝く原爆忌
東京 吉田かずや
あの頃の焦土を生き延びて
大阪市 建石 信夫
大分市 建石 信夫
還り来ぬ者の墓標や雲の峰
館山市 岡崎 建一
噴水の真直に立てる被爆の地
佐世保市 相川 正敏
語り継ぐ人なりてこそ終戦日
神戸市 林 仁子
風見鶏ゆつくり回る広島忌
相模原市 はやし 央
粥吹いてすする八月十五日
加古川市 中村 立身

<歌集>

い歌の作り方が分かったと共ユモアあふれる
豊かな人物像も浮かぶ。ハウィンナワルツ
に合はせて踊る噴水を教師をばりしれを見てを
りつ(本阿弥書店・3300円)
◇小泉史昭『時の雫』 身辺の事象をとな
えて言葉にとどめる第3歌集。文語・旧仮名を
用いることにより繊細な叙情性を創り出す。
心ゆくまでしたたかに街の景をばらばらと
とほり雨過ぐ(六花書林・2640円)
◇標珠美『ホモサピエンスの卵』 翻訳者
である著者の第1歌集。感覚をいかした詩的な
飛躍に広がりがある。△こんなにもひとりだ
夜がシロナガスクジラの骨格のごと降りくる△
(角川書店・2860円) (歌人・中川和子)

米川千嘉子 選

「フジキカンス」電報は兄でなく姉の許嫁
だった。母の顔見る 熊野市 鈴木 圭子
△評△実の息子も娘の婚約者もどちらもか
けがのない存在だが、10歳位だった作者
が見た母の表情を思う。兄は帰ったか。
卓袱台にスポットライト一葉の夕餉を照らす
灯火管制 取手市 武村 岳男

加藤 治郎 選

△評△これも食べ盛りだった作者の、つら
く鮮やかな記憶。家族が一夜を見下ろす。
かの世にて会はずが名を告げん名付け得
ずして征きたる父に 四日市市 佐藤 径
目の前の饅頭次に会うのはいつ米寿我らは
飢餓因子持つ 松戸市 平井 衣
終戦を迎へし後も戦死者の命吸ひたるシベリ
アの地は 神戸市 中林 照明
母親の袋の中に戦火避けついに傘寿のわれの
平和よ 東京 河野多香子
戦死せし大祖父ふたりの位牌研ぐ八十年の歴
史の重み 愛知 重野 宏美
無人飛行機女性スナイパー燃える窓映画のや
うに馴らされて見る 北九州市 松尾あけみ
愛国は愛国民でないことに注意をせよと先人
の声 春日部市 宮代 康志
AIを平和のための道具にと被爆ヒアノは静
かに奏つ 藤沢市 井上 渚

水原 紫苑 選

キノコ雲ゆつくり消えてゆく空に干されたま
まの水玉の傘 所沢市 里見 脩一
△評△キノコ雲はずっと空にあったのであ
る。長い時間をかけて消えてゆくのだ。水
玉の傘は人々を癒やす営為の象徴である。
地球儀をふっと回して止まりたる指の先にも
ミサイルが飛ぶ 東京 稲山 博司
△評△偶然地球儀が止まったところにもミ
サイルが飛ぶのだ。指先と地球がつながる。
校庭の百葉箱も終戦を静かに見つめ鎮魂歌の
日 川崎市 新井 将
写真でも撮ればいいかと閃いて夏の閃光ま
なうらを灼く 平塚市 芝澤 樹
焦げてゆくにおいを知らぬ。終戦は母のうま
れるたった二年前 狭山市 鈴音りんか
敵兵が天国までも追って来て百一歳の父は戦
う 春日市 伊藤 亮
英語歌詞混ざる日本のポップスが自由の証
平和の証 鳥取市 中之島 潤
日英独何語だったか前世の最後に聞いた「総
員退艦」 千葉市 板久 宏昭
爆発のおとに花火をさがす夜あたりまえでは
ないこの平和 東京 松 あき子
この町が 消えてしまった 空襲の 記憶伝
えん 朗読劇で 大分市 姫野 俊治

伊藤 一彦 選

終戦の夜の祈りか父母は星に視かれ抱きあつ
てゐた 東京 池崎富実夫
△評△人間のもっとも本質的な愛の行為は
戦争にも打ち勝つだろう。その祈りの光景
を見たのは星たちと少年。
さようなら 正義のように茂りゆく鶴にアン
ネの目が隠される 明石市 石村 まい
△評△ツタの緑が隠そうとするのはアンネ
の目、そして私たちの目。だが光は届く。
戦争のさなかに花は揺れているそよ風にゆれ
る日を待っている 横浜市 大原 香花
黙禱中ふいに風、たぶん八月のあの爆風の形
見と思う 千葉市 星野 珠青
二本松少年隊の子どもたち遠足のごと向かう
戦場 仙台市 梅津シゲル
キノコ雲 無邪気な指の その先は 原爆知
らぬ 入道雲 福岡 母 娘 午
雨上りの聖地ファティマにわれは見え奇跡な
らざる平和の虹を 東京 福島 隆史
ただひとつ父の語りし戦争は「戦友はみな南
方へゆく」 東京 野上 卓
麦飯を食うことのなき父なりきあの戦争がな
せしわざなり つくば市 小林 浦波
終戦日終わったことにしたいのは戦ではなく
記憶でしようか 越谷市 新 道

大國の庄に歪になる地球半熟たまごの危ふ
さ秘むる 伊丹市 岡本 信子
△評△他国への侵略を大國が圧力をかけて
行つ今の地球を、もろく危うい「半熟たま
ご」にたとえる。壊れてからは遅いと。
ひいおじいちゃんと呼ぶには若すぎる出征前
の曾祖父の遺影 相模原市 榎本 ハナ
△評△「若すぎる」遺影という表現。戦争
体験をこの若い作者は受け継いでいる。
死んで良い命なんかは無いけれど有ると言わ
せるそれが戦争 筑紫野市 二宮 正博
爆撃のニュースに慣れて無反応熊出沒を恐れ
る平和 豊中市 翠 眞
慰霊の日平和の礎に手を合はす車椅子に乗
るあまたの老が 鹿嶋市 大熊佳世子
読ませてはならないもう二度と「ヘイタイサ
ン」の戦死の絵本 春日井市 月夜の雨
捕虜たりしシベリアを経て父の聞く「港が見
える丘」は甘やか 和歌山市 中尾 加代
戦いをやめろーと叫んでいた人が勝てーと言
い始める恐ろしさ 西宮市 鎌田 佳代
戦場に死者に手向ける花もなし沖繩に聴くお
ばあの語り 神戸市 中林 照明
現代も「君死にたまふことなかれ」悲しく響
く世界あちこち 池田市 松本 尚子

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます